

# Contents

1	初めての駅	2
2	窓際のトットちゃん	4
3	新しい学校	9
4	気に入ったわ	10
5	校長先生	12

# Chapter1 初めての駅

じゅう おか えき おおいまちせん お  
自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手を引っ張って、  
かいさつぐち で  
改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり電車に乗ったことがなかったから、大切に握っていた切符をあげちゃうのは、もったいないなと思った。

そこで、かいさつぐちのおじさんに、「このきっぷ、もらっちゃいけない？」と聞いた。おじさんは「ダメだよ」というと、トットちゃんの手から、きっぷとあ  
改札口の箱にいっぱい溜まっている切符をさして聞いた。「これ、ぜんぶ、おじさんの？」おじさんは、ほかでいひときっぷ  
他の出て行く人の切符をひったくりながら答えた。「おじさんのじゃないよ、えき  
駅のだから」「へーえ……」トットちゃんは、みれん  
未練がましく、はこ のぞ こ  
箱を覗き込みながら言った。「わたし おとな  
私、大人になったら、きっぷ うひと  
切符を売る人になろうと思うわ」おじさんは、はじめて、トットちゃんをチラリと見て、いった。「うちの おとこ こ えき はたら  
うちの男の子も、駅で働きたいって、いってるから、いっしょにやるといいよ」

トットちゃんは、すこ はな  
少し離れて、おじさんを見た。おじさんはふと  
肥っていて、めがね  
眼鏡をかけていて、よくみると、やさしそうなのところもあった。「ふん……」トットちゃんは、手  
を腰に当てて、かんさつ  
観察しながら言った。「おじさんとこのこ  
子と、いっしょ  
一緒にやってもいいけど、かんが  
考 えとくわ。あたし、これから あたら がっこう い  
新しい学校に行くんで、忙しいから」そういうと、トットちゃんは、ま  
待ってるママのところに走っていった。そして、こうさけ  
叫んだ。「わたし  
私、きっぷや  
切符屋さんになろうと思うんだ！」ママは、おどろ  
驚きもしないで、いった。「でも、スパイ  
になるって言ってたのは、どうするの？」

トットちゃんは、ママに て と  
手を取られてあるだ  
歩き出しながら、かんが  
考えた。(そうだわ。きのう  
までは、ぜったい  
絶対にスパイになろう、ってき  
決めてたのに。でも、いまのきっぷ  
切符をいっぱいはこ  
箱にしまっておく人になるのも、とても、いいと思うわ)「そうだ！」トットちゃんは、いい  
ことを思いついて、ママの かお  
顔をのぞきながら、おおごえ  
大声をはりあげていった。「ねえ、ほんとう  
本当はスパイなんだけど、きっぷや  
切符屋さんなのは、どう？」ママはこた  
答えなかった。

ほんとう  
本当のことを言うと、ママはとてもふあん  
不安だったのだ。もし、これから行く い しょうがっこう  
小学校で、トットちゃんのことを、あずかってくれなかったら……。ちい はな  
小さい花のついた、フェ

ルトの帽子をかぶっている、ママの、きれいな顔が、少しまじめになった。そして、道を飛び跳ねながら、何かを早口でしゃべってるトットちゃんを見た。トットちゃんは、ママの心配を知らなかったから、顔があうと、うれしそうに笑っていった。「ねえ、私、やっぱり、どっちもやめて、チンドン屋さんになる！！」ママは、多少、絶望的な気分と言った。「さあ、遅れるわ。校長先生が待ってらっしゃるんだから。もう、おしゃべりしないで、前を向いて、歩いてちょうだい」二人の目の前に、小さい学校の門が見えてきた。

## Chapter2 窓際のトットちゃん

あたらしい学校<sup>がっこう</sup>の門<sup>もん</sup>をくぐる前<sup>まえ</sup>に、トットちゃん<sup>ねん</sup>のママが、なぜ不安<sup>ふあん</sup>なのかを説明<sup>せつめい</sup>すると、それはトットちゃんが、小学校<sup>しょうがっこう</sup>一年<sup>ねん</sup>なのにかかわらず、すでに学校<sup>がっこう</sup>を退学<sup>たいがく</sup>になったからだった。一年生<sup>いちねんせい</sup>で!!

つい先週<sup>せんしゅう</sup>のことだった。ママはトットちゃん<sup>ねん</sup>の担任<sup>たんになん</sup>の先生<sup>せんせい</sup>に呼ばれて、はっきり、こういわれた。

「お宅<sup>たく</sup>のお嬢<sup>じょう</sup>さんがいると、クラス<sup>じゅう</sup>中の迷惑<sup>めいわく</sup>になります。よその学校<sup>がっこう</sup>にお連れください!」若くて美しい女<sup>わか うつく おんな</sup>の先生<sup>せんせい</sup>は、ため息<sup>いき</sup>をつきながら、繰り返し<sup>く かえ</sup>返した。「本当に困<sup>こま</sup>ってるんです!」ママはびっくりした。(一体<sup>いったい</sup>、どんなことを……。クラス<sup>じゅう</sup>中の迷惑<sup>めいわく</sup>になる、どんなことを、あの子<sup>こ</sup>がするんだろうか……)

先生<sup>せんせい</sup>は、カールしたまつ毛<sup>げ</sup>をパチパチさせ、パーマのかかった短い内巻<sup>みじか うちまき</sup>の毛<sup>け</sup>を手でなでながら説明<sup>せつめい</sup>に取り掛<sup>と</sup>かった。

「まず、授業<sup>じゅぎょう</sup>中に、机<sup>つくえ</sup>のフタを、百ぺんくらい、あけたり閉めたりするんです。そこで私<sup>わたし</sup>が、用事<sup>ようじ</sup>がないのに、開けたり閉めたりしてはいけませんと申しますと、お宅<sup>たく</sup>のお嬢<sup>じょう</sup>さんは、ノートから、筆箱<sup>ふでばこ</sup>、教科書<sup>きょうかしょ</sup>、全部<sup>ぜんぶ</sup>を机<sup>つくえ</sup>の中にしまっけてしまっけて、一つ一つ取り出すんです。たとえば、書き取り<sup>かきと</sup>をしますとしますね。するとお嬢<sup>じょう</sup>さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン! とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭<sup>あ</sup>を中<sup>あた</sup>につっこんで筆箱<sup>ふでばこ</sup>から“ア”を書いための鉛筆<sup>えんぴつ</sup>を出すと、急いで閉めて、“ア”を書きます。ところが、うまく書けなかったり間違えたりしますね。そうすると、フタを開けて、また頭<sup>あ</sup>を突っ込んで、消しゴム<sup>け ごむ</sup>をだし、閉めると、急いで消しゴム<sup>け ごむ</sup>を使い、次に、すごい早さ<sup>はや</sup>で開けて、消しゴム<sup>け ごむ</sup>をしまっけて、フタを閉めてしまいます。で、すぐ、また開けるので見てますと、“ア”ひとつだけ書いて、道具<sup>どうぐ</sup>をひとつひとつ、全部<sup>ぜんぶ</sup>しまっけてしまいます。鉛筆<sup>えんぴつ</sup>をしまい、閉めて、また開けてノートをしまい……というふうに。そして、次の“イ”のときに、また、ノートから始<sup>はじ</sup>まって、鉛筆<sup>えんぴつ</sup>、消しゴム<sup>け ごむ</sup>……その度<sup>たび</sup>に、私<sup>わたし</sup>の目の前<sup>め まえ</sup>で、目まぐるしく、机<sup>つくえ</sup>のフタが開いたり閉まったり。私<sup>わたし</sup>、目<sup>め</sup>が回るんです。でも、一応<sup>いちおう</sup>、用事<sup>ようじ</sup>があるんですから、

いけないとは申せませんが……」先生のまつ毛が、その時を思い出したように、パチパチと早くなった。

そこで聞いて、ママには、トットちゃんが、なんで、学校の机を、そんなに開けたり閉めたりするのか、ちょっとわかった。というのは、初めて学校に行き帰ってきた日に、トットちゃんが、ひどく興奮して、こうママに報告したことを思い出したからだ。「ねえ、学校って、すごい。家の机の引き出しは、こんな風に、引っ張るのだけど、学校のはフタが上にあがる。ゴミ箱のフタと同じなんだけど、もっとツルツルで、いろんなものが、しまえて、とってもいいんだ！」ママには、今まで見たことのない机の前で、トットちゃんが面白がって、開けたり閉めたりしてる様子が目に見えるようだった。そして、それは、(そんなに悪いことではないし、第一、だんだん馴れてくれば、そんなに開けたり閉めたりしなくなるだろう)と考えたけど、先生には、「よく注意しますから」といった。ところが、先生には、それまでの調子より声をもうすこし高くして、こういった。「それだけなら、よろしいんですけど！」ママは、すこし身がちぢむような気がした。先生は、体を少し前にのり出すといった。「机で音を立ててないな、と思うと、今度は、授業中、立ってるんです。ずーっと！」ママは、またびっくりしたので聞いた。「立ってるって、どこにでございましょうか？」先生はすこし怒った風にいった。「教室の窓のところですよ！」ママは、わけが分からないので、続けて質問した。「窓のところで、何をしてるんでしょうか？」先生は、半分、叫ぶような声で言った。「チンドン屋を呼び込むためです。」

先生の話を、まとめて見ると、こういうことになるらしかった。一時間目に、机をパタパタを、かなりやると、それ以後は、机を離れて、窓のところに立って外を見ている。そこで、静かにしてしてくれるのなら、立っててもいい、と先生が思った矢先に、突然、トットちゃんは、大きい声で「チンドン屋さん！」と外に向かって叫んだ。だいたい、この教室の窓というのが、トットちゃんにとっては幸福なことに、先生にとっては不幸なことに、1階にあり、しかも通りは目の前だった。そして境といえ、低い、生垣があるだけだったから、トットちゃんは、簡単に、通りを歩いてる人と、話ができるわけだったのだ。さて、通りかかったチンドン屋さんは、呼ばれたか

ら教室の下まで来る。するとトットちゃんは、うれしそうに、クラス中の皆に呼びかけた。「来たわよー」。勉強してたクラス中の子供は、全員、その声で窓のところに、詰め掛けて、口々に叫ぶ。「チンドン屋さん」。すると、トットちゃんは、チンドン屋さんに頼む。「ねえ、ちょっとだけで、やってみて？」学校のそばを通る時は、音をおさえめにしているチンドン屋さんも、せっかくの頼みだからというので盛大に始める。クラスネットや鉦や太鼓や、三味線で。その間、先生がどうしてるか、といえ  
ば、一段落つくまで、ひとり教壇で、ジーっと待ってるしかない。(この一曲が終わるまでの辛抱なんだから)と自分に言い聞かせながら。

さて、一曲終わると、チンドン屋さんは去って行き、生徒たちは、それぞれの席にもどる。ところが、驚いたことに、トットちゃんは、窓のところから動かない。「どうして、まだ、そこにいるのですか？」という先生の問いに、トットちゃんは、大真面目に答えた。「だって、また違うチンドン屋さんが来たら、お話しなきゃならないし。それから、さっきのチンドン屋さんが、また、戻ってきたら、大変だからです。」

「これじゃ、授業にならない、ということが、おわかりでしょう？」話してるうちに、先生は、かなり感情的になってきて、ママに言った。ママは、(なるほど、これでは先生も、お困りだわ)と思いかけた。とたん、先生は、また一段と大きな声で、こういった。「それに……」ママはびっくりしながらも、情けない思い出先生に聞いた。「まだ、あるんでございましょうか……」先生は、すぐいった。「“まだ”というように、数えられるくらいなら、こうやって、やめていただきたい、とお願いはしません!!」それから先生は、少し息を静めて、ママの顔を見て言った。「昨日のことですが、例によって、窓のところに立っているのも、またチンドン屋だと思って授業をしておりましたら、これが、また大きな声で、いきなり、『何してるの?』と、誰かに、何かを聞いているんですね。相手は、私のほうから見えませんが、誰だろう、と思っておりますと、また大きな声で、『ねえ、何をしてるの?』って。それも、今度は、通りにでなく、上のほうに向かって聞いてるんです。私も気になりまして、相手の返事が聞こえるかした、と耳を澄ましてみましたが、返事がないんです。お嬢さんは、それでも、さかんに、『ねえ、何してるの?』を続けるので、授業にもさしさわりがあるので、窓のと

ころに行<sup>い</sup>って、お嬢<sup>じょう</sup>さん<sup>はな</sup>の話<sup>あいて</sup>しかけてる相手<sup>だれ</sup>が誰<sup>み</sup>なのか、見てみようと思<sup>おも</sup>いました。  
窓<sup>まど</sup>から顔<sup>かお</sup>を出<sup>だ</sup>して上<sup>うへ</sup>を見<sup>み</sup>ましたら、なんと、つばめが、教室<sup>きょうしつ</sup>の屋根<sup>やね</sup>の下<sup>した</sup>に、巣<sup>す</sup>を作<sup>つく</sup>  
ているんです。その、つばめに聞<sup>き</sup>いてるんですね。そりゃ私<sup>わたし</sup>も、子供<sup>こども</sup>の気持<sup>きも</sup>ちが、分<sup>わ</sup>  
からないわけじゃありませんから、つばめに聞<sup>き</sup>いてることを、馬鹿<sup>ばか</sup>げている、とは申し  
ません。授業<sup>じゅぎょう</sup>中<sup>ちゅう</sup>に、あんな声<sup>こえ</sup>で、つばめに、『何<sup>なに</sup>をしてるのか?』と聞<sup>き</sup>かなくてもいい  
と、私<sup>わたし</sup>は思<sup>おも</sup>うんです」そして先生<sup>せんせい</sup>は、ママが、一体<sup>いったい</sup>なんとお詫<sup>わ</sup>びをしよう、と口<sup>くち</sup>を  
開<sup>あ</sup>きかけたのより、早<sup>はや</sup>く言<sup>い</sup>った。「それから、こういうことも、ございました。初<sup>はじ</sup>めて  
の図画<sup>ずが</sup>の時間<sup>じかん</sup>のことですが、国旗<sup>こっき</sup>を描<sup>えが</sup>いて御覧<sup>ごらん</sup>なさい、と私<sup>わたし</sup>が申しましたら、他の子<sup>ほかこ</sup>  
は、画用紙<sup>がようし</sup>に、ちゃんと日<sup>ひ</sup>の丸<sup>まる</sup>を描<sup>えが</sup>いたんですが、お宅<sup>たく</sup>のお嬢<sup>じょう</sup>さんは、朝日新聞<sup>あさひしんぶん</sup>の  
模様<sup>もよう</sup>のような、軍艦旗<sup>ぐんかんき</sup>を描<sup>えが</sup>き始めました。それなら、それでいい、と思<sup>おも</sup>ってましたら、  
突然<sup>とつぜん</sup>、旗<sup>はた</sup>の周<sup>まわ</sup>りに、ふさを、つけ始め<sup>はじ</sup>めたんです。ふさ。よく青年団<sup>せいねんだん</sup>とか、そういった  
旗<sup>はた</sup>についてます。あの、ふさです。で、それも、まあ、どこかで見<sup>み</sup>たのだろうから、と  
思<sup>おも</sup>っておりました。ところが、ちょっ<sup>め</sup>と目<sup>め</sup>を離<sup>はな</sup>したキスに、まあ、黄色<sup>きいろ</sup>のふさを、机<sup>つくえ</sup>に  
まで、どん<sup>えが</sup>どん描<sup>えが</sup>いちゃってるんです。だいたい画用紙<sup>がようし</sup>に、ほぼいっばいに旗<sup>はた</sup>を描<sup>えが</sup>いた  
んですから、ふさの余裕<sup>よゆう</sup>は、もともと、あまりなかったんですが、それに、黄色<sup>きいろ</sup>のクレ  
ヨンで、ゴシゴシふさを描<sup>えが</sup>いたんですね。それが、はみ出<sup>だ</sup>しちゃって、画用紙<sup>がようし</sup>をどかし  
たら、机<sup>つくえ</sup>に、ひどい黄色<sup>きいろ</sup>のギザギザが<sup>のこ</sup>残<sup>のこ</sup>ってしま<sup>のこ</sup>って、ふいても、こすっても、とれま  
せん。まあ、幸<sup>さいわ</sup>いなことは、ギザギザが三方向<sup>さんほう</sup>だけだった、ってことでしょうか？」マ  
マは、ちぢこまりながらも、急<sup>いそ</sup>いで質<sup>しつもん</sup>問<sup>もん</sup>した。「三方向<sup>さんほう</sup>っていうのは……」先生<sup>せんせい</sup>は、そ  
ろそろ疲<sup>つか</sup>れてきた、という様子<sup>ようす</sup>だったが、それでも親<sup>しんせつ</sup>切<sup>せつ</sup>にい<sup>はた</sup>った。「旗竿<sup>はたざお</sup>を左<sup>ひだり</sup>は<sup>は</sup>じに  
描<sup>えが</sup>きましたから、旗<sup>はた</sup>のギザギザは、三方向<sup>さんほう</sup>だけだったんでござい<sup>すこ</sup>ます」ママは、少し助<sup>たす</sup>  
かった、と思<sup>おも</sup>って、「はあ、それで三方向<sup>さんほう</sup>だけ……」とい<sup>せんせい</sup>った。すると、先生<sup>せんせい</sup>は、次<sup>つぎ</sup>に、  
と<sup>くちよう</sup>っても、ゆ<sup>ひとこと</sup>っくりの口調<sup>くちよう</sup>で、一<sup>く</sup>言<sup>ぎ</sup>ずつ区切<sup>か</sup>って「た<sup>はたざお</sup>だし、その代<sup>か</sup>わり、旗竿<sup>はたざお</sup>のは<sup>は</sup>じ  
が、やはり、机<sup>つくえ</sup>に、は<sup>だ</sup>み出<sup>のこ</sup>して、残<sup>のこ</sup>っております!!」それから先生<sup>せんせい</sup>は立<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>がると、か  
なり冷<sup>つめ</sup>たい感<sup>かん</sup>じで、とどめをさ<sup>い</sup>すように言<sup>めい</sup>った。「それと、迷<sup>めい</sup>惑<sup>わく</sup>しているのは、私<sup>わたし</sup>だけ  
ではござい<sup>となり</sup>ません。隣<sup>い</sup>の一年生<sup>いちねんせい</sup>の受<sup>う</sup>け持<sup>も</sup>ちの先生<sup>せんせい</sup>もお困<sup>こま</sup>りのことが、あるそうですか  
ら……」ママは、決<sup>けっしん</sup>心<sup>しん</sup>しないわけには、い<sup>たし</sup>かな<sup>ほか</sup>かった。(確<sup>たし</sup>かに、これ<sup>ほか</sup>じゃ、他の<sup>せいと</sup>生徒<sup>せいと</sup>)

さんに、ご迷惑<sup>めいわく</sup>すぎる。どこか、他の学校<sup>ほかに がっこう さが</sup>を探して、移<sup>うつ</sup>したほうが、よさそうだ。何とか、あの子<sup>こ</sup>の性格<sup>せいかく</sup>がわかっていただけて、皆<sup>みな</sup>と一緒<sup>いっしょ</sup>にやっ<sup>おし</sup>ていくことを教えてくださるような学校<sup>がっこう</sup>に……) そうして、ママが、あっちこっち、かけずりまわって見<sup>み</sup>つけたのが、これから行<sup>い</sup>こうとしている学校<sup>がっこう</sup>、というわけだったのだ。ママは、この退学<sup>たいがく</sup>のことを、トットちゃんに話<sup>はな</sup>していなかった。話<sup>はな</sup>しても、何<sup>なに</sup>がいけなかったのか、わからないだろうし、また、そんなにことで、トットちゃんが、コンプレックスを持<sup>も</sup>つのも、よくないと思<sup>おも</sup>ったから、(いつか、大き<sup>おお</sup>くなったら、話<sup>はな</sup>しましょう) と、きめていた。ただ、トットちゃんには、こうい<sup>い</sup>った。「新<sup>あた</sup>しい学校<sup>がっこう</sup>に行<sup>い</sup>ってみない? いい学校<sup>がっこう</sup>だって話<sup>はなし</sup>よ」トットちゃんは、少<sup>すこ</sup>し考<sup>かん</sup>えてから、言<sup>い</sup>った。「行<sup>い</sup>くけど……」ママは、(この子<sup>こ</sup>は、今何<sup>いまなに</sup>を考<sup>かん</sup>えてるのだろうか) と思<sup>おも</sup>った。(うすうす、退学<sup>たいがく</sup>のこと、気<sup>き</sup>がついていたんだらうか……) 次<sup>つぎ</sup>の瞬<sup>しゅん</sup>間<sup>かん</sup>、トットちゃんは、ママの腕<sup>うで</sup>の中<sup>なか</sup>に、飛<sup>と</sup>び込<sup>こ</sup>んで来<sup>き</sup>て、い<sup>い</sup>った。「ねえ、今度<sup>こんど</sup>の学校<sup>がっこう</sup>に、いいチンドン屋<sup>や</sup>さん、来<sup>く</sup>るかな?」とにかく、そんなわけ<sup>わけ</sup>で、トットちゃんとママは、新<sup>あた</sup>しい学校<sup>がっこう</sup>に向<sup>む</sup>かって、歩<sup>ある</sup>いているのだった。



## Chapter3 新しい学校

学校の門が、はっきり見えるところまで来て、トットちゃんは、立ち止った。なぜなら、この間まで行っていた学校の門は、立派なコンクリートみたいな柱で、学校の名前も、大きく書いてあった。ところが、この新しい学校の門ときたら、低い木で、しかも葉っぱが生えていた。

「地面から生えてる門ね」

と、トットちゃんはママに言った。そうして、こう、付け加えた。

「きっと、どんだんはえて、今に電信柱より高くなるわ」

確かに、その二本の門は、根っこのある木だった。トットちゃんは、門に近づくと、いきなり顔を、斜めにした。なぜかといえば、門にぶら下げてある学校の名前を書いた札が、風に吹かれたのか、斜めになっていたからだった。

「トモエがくえん」トットちゃんは、顔を斜めにしたまま、表札を読み上げた。そして、ママに、

「トモエって、なあに？」

と聞こうとしたときだった。トットちゃんの目の端に、夢としか思えないものが見えたのだった。トットちゃんは、身をかがめると、門の植え込みの、隙間に頭を突っ込んで、門の中をのぞいてみた。どうしよう、みえたんだけど！

「ママ！ あれ、本当の電車？ 校庭に並んでるの」

それは、走っていない、本当の電車が六台、教室用に、置かれてあるのだった。

トットちゃんは、夢のように思った。“電車の教室……”

電車で窓が、朝の光を受けて、キラキラと光っていた。目を輝かして、のぞいているトットちゃんの、ホッペタも、光っていた。

## Chapter4 気に入ったわ

つぎ しゅんかん かんせい あ でんしゃ きょうしつ  
次の瞬間、トットちゃんは、「わーい」と歓声を上げると、電車の教室のほう  
む はし だ はし む さけ  
に向かって走り出した。そして、走りながら、ママに向かって叫んだ。

「ねえ、<sup>はや</sup>早く、<sup>うご</sup>動かない<sup>でんしゃ</sup>電車に<sup>の</sup>乗ってみよう!

ママは、<sup>おどろ</sup>驚<sup>はし</sup>いて走り出した。もとバスケットボールの<sup>だ</sup>選<sup>せんしゅ</sup>手<sup>あし</sup>だったままの足は、トットちゃんより<sup>はや</sup>速<sup>あ</sup>かったから、トットちゃんが、<sup>あと</sup>後<sup>あと</sup>、ちょっとでドア、というときに、スカート<sup>つか</sup>を捕<sup>つか</sup>まえられてしまった。ママは、スカートのはしを、ぎ<sup>にぎ</sup>っちり握<sup>にぎ</sup>ったまま、トットちゃんにいった。

「ダメよ。この電車は、この学校のお教室なんだし、あなたは、まだ、この学校に入れていただいてないんだから。もし、どうしても、この電車に乗りたかったら、これからお目にかかる校長先生とちゃんと、お話してちょうだい。そして、うまくいったら、この学校に通えるんだから、分かった?」

トットちゃんは、（今乗れないのは、とても残念なことだ）と思ったけど、ママの  
いう通りにしようときめたから、大きな声で、

「うん」

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 8

「わたし、この<sup>がっこう</sup>学校、とっても<sup>きい</sup>気に入ったわ」

ママは、トットちゃんが気に入ったかどうかより、校長先生が、トットちゃんを気に入ってくださるかどうか問題なのよ、といたい気がしたけど、とにかく、トットちゃんのスカートから手を離し、手をつないで校長室のほうに歩き出した。

どの電車も静かで、ちょっと前に、一時間目の授業が始まったようだった。あまり  
り広くない校庭の周りには、塀の変わりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇  
には、赤や黄色の花がいっぱい咲いていた。

こうちょうしつ　でんしゃ　もん　しょうめん　み　おうぎがた　ひろ  
校 長 室 は、電 車 で は な く、ち ょ う ど、門 か ら 正 面 に 見 え る 扇 形 に 広 が っ た 七

だん　いし　かいだん　のぼ　みぎて  
段 くら い あ る 石 の 階 段 を 上 っ た、そ の 右 手 に あ っ た。

トットちゃんは、ママの手を振り切ると、階段を駆け上がって行ったが、急に止まっ

て、振り向いた。だから、後ろから行ったママは、もう少しで、トットちゃんと正面衝突するところだった。

「どうしたの？」

ママは、トットちゃんの気が変わったのかと思って、急いで聞いた。トットちゃんは、ちょうど階段の一番うえに立った形だったけど、まじめな顔をして、小声でママに聞いた。

「ねえ、これからあいに行く人って、駅の人なんじゃないの？」

ママは、かなり辛抱づよい人間だったから……というか、面白がりやだったから、やはり小声になって、トットちゃんに顔をつけて、聞いた。

「どうして？」

トットちゃんは、ますます声をひそめて言った。

「だってさ、校長先生って、ママいったけど、こんなに電車、いっぱい持ってるんだから、本当は、駅の人なんじゃないの？」

確かに、電車の払い下げを校舎にしている学校なんてめずらしいから、トットちゃんの疑問も、もっとものこと、とママも思ったけど、この際、説明してるヒマはないので、こういった。

「じゃ、あなた、校長先生に伺って御覧なさい、自分で。それと、あなたのパパのことを考えてみて？ パパはヴァイオリンを弾く人で、いくつかヴァイオリンを持ってるけど、ヴァイオリン屋さんじゃないでしょう？ そういう人もいるのよ」トットちゃんは、「そうか」というと、ママと手をつないだ。

## Chapter5 校長先生

トットちゃんとママが入っていくと、部屋の中にいた男の人が椅子から立ち上がった。その人は、頭の毛が薄くなっていて、前のほうの歯が抜けていて、顔の血色がよく、背はあまり高くないけど、肩や腕が、がっちりしていて、ヨレヨレの黒の三つ揃いを、キチンと着ていた。トットちゃんは、急いで、お辞儀をしてから、元気よく聞いた。「校長先生か、駅の人か、どっち?」「校長先生だよ」トットちゃんは、とってもうれしそうに言った。「よかった。じゃ、おねがい。私、この学校にいたい」校長先生は、椅子をトットちゃんに勧めると、ママのほうを向いて言った。「じゃ、僕は、これからトットちゃんと話がありますから、もう、お帰り下さって結構です」ほんのちょっとの間、トットちゃんは、少し心細い気がしたけど、なんとなく、(この校長先生ならいいや)と思った。ママは、いさぎよく先生にいった。「じゃ、よろしく、お願いします」そして、ドアを閉めて出て行った。校長先生は、トットちゃんの前に椅子を引っ張ってきて、とても近い位置に、向かい合わせに腰をかけると、こういった。「さあ、何でも、先生に話してごらん。話したいこと、全部」「話したいこと!?(なにか聞かれて、お返事するのかな?)」と思っていたトットちゃんは、「何でも話していい」と聞いて、ものすごくうれしくなって、すぐ話し始めた。順序も、話し方も、少しグチャグチャだったけど、一生懸命に話した。今乗ってきた電車が速かったこと。

駅の改札口のおじさんに、お願いしたけど、切符をくれなかったこと。前に行っていた学校の受け持ちの女の先生は、顔がきれいだということ。その学校には、つばめの巣があること。家には、ロッキーという茶色の犬がいて“お手”と“ごめんくださいませ”と、ご飯の後で、“満足、満足”ができること。幼稚園のとき、ハサミを口の中に入れて、チョキチョキやると、「舌を切ります」と先生が怒ったけど、何回もやっちゃったということ。涙が出てきたときは、いつまでも、ズルズルやっていると、ママにしかられるから、なるべく早くかむこと。パパは、海で泳ぐのが上手で、飛び込みだってできること。こういったことを、次から次と、トットちゃんは話した。先生は、笑ったり、うなずいたり、「これから?」とかいったりしてくださったから、うれしくて、トッ

トットちゃんは、いつまでも話した。でも、とうとう、話がなくなった。トットちゃんは、口をつぐんで考えていると、先生はいった。「もう、ないかい？」トットちゃんは、これでおしまいにしてしまうのは、残念だと思った。せっかく、話を、いっぱい聞いてもらう、いいチャンスなのに。(なにか、話は、ないかなあ……) 頭の中が、忙しく動いた。と思ったら、「よかった!」。話が見つかった。それは、その日、トットちゃんが着てる洋服のことだった。たいがいの洋服は、ママが手製で作ってくれるのだけれど、今日のは、買ったものだった。というのも、なにしろトットちゃんが夕方、外から帰ってきたとき、どの洋服もビリビリで、ときには、ジャキジャキのときもあったし、どうしてそうなるのか、ママにも絶対わからないのだけれど、白い木綿でゴム入りのパンツまで、ビリビリになっているのだから。トットちゃんの話によると、よその家の庭をつきって垣根をもぐったり、原っぱの鉄条網をくぐるとき、「こんなになっちゃうんだ」ということなのだけれど、とにかく、そんな具合で、結局、今朝、家をでるとき、ママの手製の、しゃれたのは、どれもビリビリで、仕方なく、前に買ったのを着てきたのだった。それはワンピースで、エンジとグレーの細かいチェックで、布地はジャージだから、悪くはないけど、衿にしてある、花の刺繍の、赤い色が、ママは、「趣味が悪い」といっていた。そのことを、トットちゃんは、思い出したのだった。だから、急いで椅子から降りると、衿を手で持ち上げて、先生のそばに行き、こういった。「この衿ね、ママ、嫌いなんだって!」

それをいってしまったら、どう考えてみても、本当に、話しはもう無くなった。トットちゃんは(少し悲しい)と思った。トットちゃんが、そう思ったとき、先生が立ち上がった。そして、トットちゃんの頭に、大きく暖かい手を置くと、「じゃ、これで、君は、この学校の生徒だよ」そういった。……その時、トットちゃんは、なんだか、生まれて初めて、本当に好きな人にあったような気がした。だって、生まれてから今まで、こんな長い時間、自分の話を聞いてくれた人は、いなかったんだもの。そして、その長い時間の間、一度だって、あくびをしたり、退屈そうにしないで、トットちゃんが話してるのと同じように、身を乗り出して、一生懸命、聞いてくれたんだもの。

トットちゃんは、このとき、まだ時計が読めなかったんだけど、それでも長い時間、

とおも  
と思ったくらいなんだから、もし読めたら、ビックリしたに違いない。そして、もっと  
先生に感謝したに違いない。というのは、トットちゃんとママが学校に着いたのが八時  
で、校長室で全部の話が終わって、トットちゃんが、この学校の生徒になった、と  
き  
決まったとき、先生が懐中時計を見て、「ああ、お弁当の時間だな」といったから、つ  
まり、たっぷり四時間、先生は、トットちゃんの話<sup>はなし</sup>を聞いてくれたことになるのだっ  
た。後にも先にも、トットちゃんの話<sup>はなし</sup>を、こんなにちゃんと聞いてくれた大人は、い  
なかった。それにしても、まだ小学校一年生になったばかりのトットちゃんが、四時間  
も、一人でしゃべるぶんの話<sup>はなし</sup>しがあったことは、ママや、前の学校の先生が聞いたら、  
き  
きっと、ビックリするに違いないことだった。

このとき、トットちゃんは、まだ退学<sup>たいがく</sup>のことはもちろん、周りの大人が、手こずっ  
てることも、気がついていなかったし、もともと性格も陽気<sup>ようき</sup>で、忘れっぽいタチだった  
から、無邪気<sup>むじゃき</sup>に見えた。でも、トットちゃんの中のどこかに、なんとなく、疎外感<sup>そがいかん</sup>のよ  
うな、他の子供と違って、ひとりだけ、ちょっと、冷たい目で見られているようなもの  
を、おぼろげには感じていた。それが、この校長先生<sup>こうちょう</sup>といると、安心<sup>あんしん</sup>で、暖かくて、  
きも  
気持ち<sup>きもち</sup>がよかった。(この人となら、ずーっと一緒にいてもいい)これが、校長先生、  
こばやしそうさくし<sup>こばやしそうさくし</sup>はじ<sup>はじ</sup>あ<sup>あ</sup>に、初めて遭った日、トットちゃん<sup>かん</sup>が感じた、感想<sup>かんそう</sup>だった。そして、有難  
いことに、校長先生<sup>こうちょう</sup>も、トットちゃんと、同じ感想<sup>かんそう</sup>を、その時<sup>とき</sup>、持っていたのだった。